

No.61 アレシュ・ヴェゼリー 「ダブルベンチ」

Aleš Veselý

北川フラムさんのコラム / 1995 (平成7) 年 6月15日付 立川市市報記事より

ベゼリーはチェコを代表する彫刻家で、ふだんは鉄と石をくみあわせた 10メートルもある、強固で、ダイナミックな作品を制作している。車止めの機能をもったベンチを作ってくれという日本からの注文に、彼はハタと困ってしまったという。

今までは人目を惹く力強い仕事をすればよかったが、今度は機能ある、人に使われるものを作らねばならない。彼は 100枚以上のデッサンをしたという。その結果がこの作品だ。

ブランコは危なくないようにバネで留めてある。形も美しい。それでいていつものベゼリーの作品になっている。

このブランコベンチは子どもたちに人気があるし、夜は恋人たちの語らいの場所になっている。

作家のメッセージ / 日本住宅公団 (現: UR 都市機構) 「ミニ通信」より

立川のための私のベンチ彫刻について語るならば、1991年私が初めて日本を訪れたときのことから始めたいと思います。

私は日本にいる何人かの友人に、かなり大きな立体作品のアイデアとプロジェクトを表したドローイングを数点残していきました。

これらのドローイングは北川フラムさんの手にも渡り、92年横浜のNICAFで展示されました。私は大分後になって個人的に、実際のところ偶然に、93年のヴェニスビアンナーレのプレヴェーで北川さんとお会いし、私たちは互いに自己紹介しました。

それから間もなく、私の立川アートプロジェクトへの参加が検討されていることを知りました。最初私は、高層ビルの一隅に弓状の鋼鉄の軸をたわませ、その一端に巨大な車輪を固定した、大きなコーナーカーのためのプロジェクトを考えました。

その後、“ベンチの機能をもった彫刻を”というファクスが来ました。

最初私は当惑し、がっかりしました。それから私は一生懸命考え始め、ある解決を得ました。

私はただちにドローイングを描き、東京にファクスしました。

私の解決案は受け入れられました。

続いて骨の折れる作業が始まりました。

それは他のずっと大きい、一見したところではもっとやっかいな彫刻よりも、遥かに多くの時間とエネルギーを要しました。

作品が完成した今はじめて、私は、自分に作品が無意識に何を伴っていたかが解ります。

1960年代の初め、私は椅子の彫刻という問題に熱心に取り組んでいました。当時それは私にとって第一に根本的かつ哲学的問題でありました。現象としての椅子、日常生活の中で最も頻繁に使われ、“場所”となり、人間の運命の記号化された痕跡をもって人間存在を証す、保護された証拠に満ちた空虚であるシート。その頃、1960年代、私はこの問題をより実在的な方法で考えていました。時の流れと、新しい出来事と経験が、この問題を私の興味から遠く引き離しました。私は自然の力とその法則を、潜在的エネルギーの表現、そして物理的法則と人間存在のつながりとして探究し、宇宙の変化と動きの絶えざるプロセスにおける個人の位置について考察することに熱中していました。ですからベンチ彫刻は私の思考のコンテクストの枠からははずれているように思われました。しかし、重要なことはおそらく、その構想の大変長いプロセスにあったのでしょう。最初のドローイングから彫刻の最終的な形まで見た目にはあまり変わっていませんが、にもかかわらず、あらゆるディテールは100回も考え抜かれたものでした。こうした一連の熟考は、この一見実用本位のプロジェクトに私のそれまでのすべての経験とともに強い影響を与える結果となりました。今一度、場所という現象が私のまえに立ち現れ、新たな次元を明らかにしたのです。私のベンチ彫刻は、休息したり、人と待ち合わせをしたり、子供が遊んだりするためのただのベンチ以上のものになると私は感じています。私にとって、非常に重要なのは、実用的な機能と場所の神秘性という両義性です。その“場所”の特殊性と神秘性を強調し、ある物理的に決定された場所の特殊性と神秘性を強調し、ある物理的に決定された場所にエネルギーを集中させるのです。これにより、彫刻はメッセージー人間存在の絶えざるエネルギーの証に満たされた神秘的な場所一となるのです。私の作品からこのエネルギーの力がさらに発されんことを信じています。